



NGO活動紹介 イランの障害者を支援するミントの会

「だれ一人取り残さない」社会の実現を！

イランの車いす障害者（脊髄・頸髄損傷者）は、入院期間が1か月半から2か月程度と短いため、リハビリや障害に関する知識を得る機会が少なく、自宅で寝たきり生活や引きこもりになりがちです。多くの障害者は交通事故が原因で、働き盛りの年代が多いため、生計の維持が難しく、困窮状態に陥ることも少なくありません。医療費の自己負担は7割で、大きな負担となっています。

ミントの会の代表パシャイさんは、日本で脊髄損傷を経験し、日本のリハビリ・社会サービスを受けて社会復帰を果たしました。故郷イランの障害者の力になりたいと考え、2010年に「イランの障害者を支援するミントの会」を設立しました。イランでは「ミント」には「根付いて広がる」という意味があり、ミントのようにこの活動が広がって欲しいという気持ちが込められています。

ミントの会は、イランの行政・医療福祉関係者や障害NGOにリハビリ・バリアフリー・看護の知識や技術を伝え、人材育成と障害者およびその家族の支援を行ってきました。障害者のニーズを社会に伝えるネットワークを形成し、地域に根付いた活動を展開しています。

2022年からは現地にNGOミントリハビリテーションセンター（以下、「ミントセンター」）を運営し、障害者の社会参加の場の提供や経済的自立のための技能習得、地域社会への啓蒙活動に取り組んでいます。この活動は、障害者の権利を守り、SDGs目標の「だれ一人取り残さない」社会を目指す重要な取り組みです。特に、ミントセンターでは、障害者が主体的に参加し、研修の企画やポスター・資料のデザイン、パソコンを使った印刷作業など、一連の活動を行えるよう支援しています。これらの活動は、障害者の印刷技術の向上だけでなく、社会参加の機会を増やし、ひいては就労へと繋がることを目指しています。

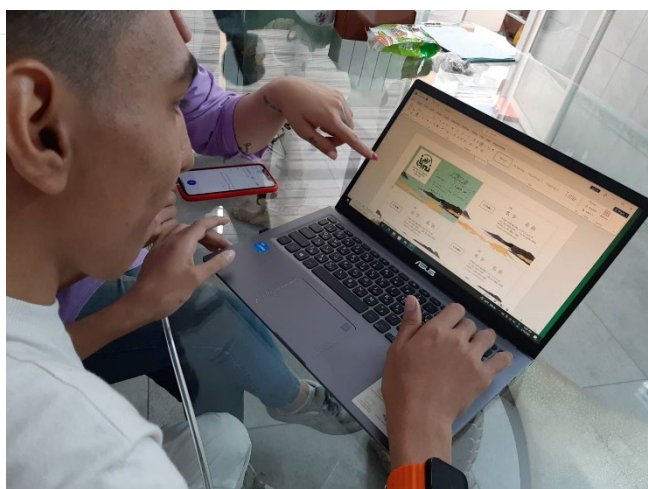
ゆうちょ財団では、2023年度からミントの会の活動を助成しています。このたび、団体の代表パシャイさんと理事の大澤照枝さんにお話を伺いました。

――イランにおける**車いす障害者の現状**(リハビリ、就労、社会参加など)を具体的に教えていただけますか。また、そうした状況を踏まえてミントの会創設に至った創設者としての思いについて詳しく教えてください。

パシャイさん:イランでは、脊髄損傷を負われた方が病院に入院できる期間が、日本と比べて非常に短いという現状があります。わずか1か月半から2か月ほどの入院期間中に、自分の身体の状態や生活の方法を学ぶことは、とても難しいことです。

一方、日本においては、障害レベルが同じであっても、リハビリテーションを通して、一人暮らしや仕事、スポーツなど、多様な社会活動を行っている方が多くいらっしゃいます。しかし、イランでは、バリアフリーが進んでいない環境もあり、障害者の方々自身も「何もできない」と思い込んでしまっているケースが見られます。

私はイランに住むご家族から、このような状況を聞き、強い衝撃を受けました。日本の障害者の方々の生活や社会サービスについて知り、イランの障害者の方々にも、同じような機会を提供したいと考えるようになったのです。そして、車椅子などをイランに送り、日本の障害者の方々の生活や社会サービスについて伝える活動を開始しました。私はイランの障害者の方々が、自分自身の可能性を信じ、より豊かな生活を送れるよう、この活動を始めたのです。



(写真1): パソコンでの印刷物デザインの方法を教わっている障害者の方



(写真2): 障害者の方が自ら作った名刺を受け取る

――障害者の自立支援のために**パソコン印刷技術に着眼した理由**を教えてください。パソコン技術が障害者の収入を得る手段になる可能性についてどうお考えでしょうか。

パシャイさん・大澤さん:ミントセンターでは、活動を広めるためにパンフレットや名刺といった印刷物の重要性を強調しています。イランでは電話やインスタグラムが情報交換に多く使われますが、印刷物の方がより多くの人々に情報を届ける力があります。さらに、障害者がパソコン技術を習得することで、社会参加の幅を広げることができると考えています。

日本では障害者向けの職業訓練校があり、パソコンを使った仕事に就く人もいますが、イランではそのような機会が非常に少ないのが現状です。ミントセンターでは、パソコン技術を学ぶことで、障害を持つ方々が自身の可能性を広げ、社会に貢献できるよう支援しています。実際、パソコンを使って印刷物を作成し、それを人々に届けることで(写真1、2)、達成感を感じるという声も寄せられています。

また、収入源の多角化を目指して、パソコンやラミネーターを活用した新しい商品開発にも取り組んでいます。例えば、しおりや絵本、カレンダーなどの制作・販売を通じて、収入につなげていきたいと思っています。現在、ミントの会ではペルシャ語のホームページを作成しているメンバーが中心となり、パソコンの勉強会を定期的で開催しています。この勉強会を通じて、より多くの方々にパソコン技術を習得してもらい、将来的にはパソコンを使った仕事に結びつける仕組みを構築することを目指しています。



(写真3)：ミントデーに参加した近隣の子ども
(障害者の方が作ったチラシを持っている)

——ミントセンターを利用している障害者の方々の反応や感想、また、彼らの意識や生活にどのような変化があったのか教えてください。

パシャイさん・大澤さん：利用者の方々からは、多くの喜びの声が聞かれます。

孤独を感じていた方々が、センターで他の障害者と交流し、仲間意識を持つようになり、地域住民との交流も相互理解を深めるきっかけとなっています。

具体的な感想としては、「ミントセンターのおかげで、心身ともに健康になった」「色々なことを学べ、感謝している」「元気と笑顔、優しさをいただけて嬉しい」「パシャイさんや日本の皆様に感謝している」といったポジティブな意見が多数寄せられています。

また、障害者の方々の生活にも変化が見られます。例えば、以前は教師として働いていたという方は、「ミントセンターに通うようになってから、心身ともに状態が良くなった」と話されています。

ミントセンターは、障害者の方々に、単にリハビリを提供するだけでなく、心の支えとなり、生活の質を向上させる場所となっているようです。利用者の方々からは、「ミントセンターはパラダイスの一部」、「親切的なセンターに感謝している」といった言葉も聞かれ、ミントセンターが障害者の方々にとってかけがえのない存在となっていることがわかります。

——「ミントデー」というイベントでは、ミントセンターに近隣住民や子どもたちを招いて障害理解に触れ合う機会を設け、障害者の方との交流を深めておられます。今後、**地域社会との連携**をさらに深めるために、どのような取り組みを予定していますか。また、「ミントデー」では**日本との交流も行われているようですが、どのような反応**がありましたか。

パシャイさん・大澤さん：障害者の方々が作成したパンフレットがきっかけとなり、地域住民との交流も活発化しました。ボランティアの増加や地域全体で盛り上がるイベント開催など、ミントセンターは地域社会の中心的な役割を担うようになっています。今後も、音楽会やスポーツ大会（写真4）など、さまざまなイベントを通じて、地域との連携をさらに深めていく予定です。

日本との交流に関して、イランではアニメや「おしん」を通じて日本を知ることがありましたが、直接の交流を通じて日本の技術や温かさを実感しました。

ミントセンターでは、日本の運動療法を参考に、起き上がる、立つ、歩くといった基本的な動作の回復を目標としたりハビリテーションを行っています。日本から寄贈された車椅子やリハビリ用具を活用することで、利用者の方々は、「元気になる」「外出できるようになりたい」という強い気持ちを持ち、積極的にリハビリに取り組むようになっています。その結果、わずか1年半で利用登録者が62名に達し、通所を希望される方も増えています。



(写真4)：ミントセンターでのポッチャの集い

——最近の国際情勢を考えると、イランで活動するには、
相当な困難があるように思えますが、具体的にどのような**困難や課題**があるのか教えていただけますか。

パシャイさん・大澤さん:2022年頃からイラン国内の
治安悪化が見られ、2024年はイスラエルとの問題など
に注視しています。パシャイがイラン人なので現地の
人たちからの有益な情報を得たり、現地の日本大使館、
JICA等と連携し、日本人の現地派遣においては安全に
気を付けています。

——イランにおける障害者支援の**課題と、ミントの会様が目
指す社会**についてお聞かせください。

パシャイさん・大澤さん:イランでは、車いすをご利用
の方への支援は徐々に進んできており、通常の手椅子
は支給されるようになってきました。しかし、電動車
椅子など、高度な福祉機器の利用はまだ難しい状
況です。

ミントの会では、イランにおける障害者支援の課題
として、以下の2点を考えています。

1つ目は、障害者の方々が、必要な情報にアクセスで
きる環境を整えることです。例えば、リハビリ方法や
福祉サービスに関する情報など、日常生活を送る上で
役立つ情報を、より多くの方々に届けたいと考えてい
ます。

2つ目は、障害者の方々が気軽に集まり、仲間と交
流したり、リハビリに取り組んだりできるような場所
を提供することです。ミントセンターのような場所を、
より多くの方に利用していただき、障害者同士のつな
がりをも深めていきたいと考えています。

障害者の方々自身が、仲間と話し合い、行政に要望
を伝えたり、メディアを通じて社会に訴えかけること
で、社会参加の機会を広げていくことが大切だと考え
ています。外出が容易になることで、仕事や学業を継
続し、経済的自立や社会参加を実現できるようになれば、
障害のある方も、ない方も、共に暮らす社会の実
現に繋がると信じています。

将来的には、ミントの会が行っているような活動が、
地域全体に広がり、障害のある方もない方も、共に支
え合い、共に生きる社会を実現したいと考えています。

——**パシャイさん、大澤さん、ありがとうございました。**



(写真5)：ミントセンターにて

2025年度多文化共生推進活動とNGO海外援助活動助成の申請を募集しています。

団体としての活動開始後2年以上が経過しており、直近2年間の収入平均が5,000万円未満の団体を対象とします。

助成件数は多文化共生推進活動助成で5件程度、NGO海外援助活動助成で5件程度、助成の上限額は1件100万円(共通)とします。

公募期間(共通)は、2024年10月1日(火)～2024年10月31日(木)です。

なお、NGO海外援助活動助成においては、これまで「旧国際ボランティア貯金」の寄附金配分又は「JICA基金」の支援を受けた事業を行った団体を対象に助成を行ってきましたが、2025年度活動の募集から、過去にこのような事業を行った団体でなくても助成を受けられるよう対象を拡大しました。

「グローバルフェスタJAPAN 2024」への出展について

「グローバルフェスタJAPAN」は国際協力活動、社会貢献活動、SDGsなどに取り組む団体が一堂に会する国内最大級の国際協力イベントです。日本がODAを開始してから70年の節目の年にあたる本年度は、「国際協力70年、ともに未来へ」をテーマとして、9/28(土)29(日)の2日間、新宿住友ビル三角広場と新宿中央公園で開催されました。

ゆうちょ財団は今年もNGO、大使館、国際機関、大学、企業等と並んでブースを構え、2024年度活動の写真パネル展示等を通して、NGO・NPOの海外活動や多文化共生活動を助成していることや2025年度の助成制度の募集について周知活動を行いました。



(写真6) ゆうちょ財団のブース

編集後記

NGO活動紹介の「イランの障害者を支援するミントの会」のインタビューでは、同会代表のパシャイさんと理事の大澤照枝さんから、イランでの障害者の現状やミントの会様の取り組みと目指すところを熱く語っていただきました。また、本年度のグローバルフェスタJAPANは昨年よりも規模を拡大して開催され、活況を呈しておりました。NGO・NPOの皆様をはじめ多くの方がゆうちょ財団のブースに立ち寄ってくださいました。この場を借りてお礼申し上げます。